

城下町金沢の見通し景観

Vistas in Castle Town Kanazawa

鏑 隆弘

TSUBA Takahiro

1. はじめに

金沢の歴史的な景観を形成する大きな要素として、複雑な街路形態が挙げられる。城や城下の建物は何度か焼失しているものの、街路は16世紀末の城下町形成時から当時の形態を多く残している。城の防御機能強化の目的から、曲がり角や行き止まりなど見通しの効きにくい複雑な形態に整備されたと伝えられている。一方で、見通しの効く直線的な街路も多くあり、曲がった道の多い街中であっては、空の広がりを感じさせる象徴的な景観を作っている。明治以降に作られてきた街路は、城下町の街路形態とは異なる考え方のもと、都市計画道路を中心に主要地点を合理的に結ぶよう、グリッド状や環状の形態を持つ。人口縮小や移動手段の進化により将来的に交通量が減少することが予測されている現在においても、道路整備の建設圧力は強いものとなっている。旧来の街路形態が残っているとはいえ、整備が進み特徴的な城下町形成の意図が見えにくくなっていくことは事実である。これまで城や城下の建物についての研究は多かったが、街路や眺望の形態についての研究は少ない。これらの直線的な街路や見通しの効く眺めは、どのような意図で作られたのだろうか。他の城下町の事例も見ながら、城下町としての金沢の景観の特徴について理解を深めたい。

2. 見通しの効く街路の抽出

2-1 資料調査

金沢城下寛永年間図において、直線的な街路を抽

出し、現代の地形データ（国土地理院地図電子国土Web）を使って断面図を作成した。それを元に街路景観の見え方の検討を行った。

直線的な街路を作る際にかつては山当てという手法が使われていた。その目当てとして利用したと考えられる山の描画や名称の記述について、金沢市立玉川図書館近世資料室が所有する城下図を使って確認した。また、上坂達朗氏が作成した資料である「金沢城と城下町－金沢城が見えるまちづくり－」を基に、聞き取りと現地調査を行った。

2-2 現地踏査

地図で抽出した街路について、現地において見えるもの及びそれらの見え方について確認を行った。

3. 見通しの効く街路景観

見通しの効く直線的な街路が多くある中から、主たる街道や通りからのものと、城下町の特徴的な場所である広見からの眺めを図-1のように抽出した。これらは大きく二つに分けることができる。城方向へ見通しを持つものと、城とは別の方向に対し見通しを持つものである。

- ・ 城方向へ見通しを持つ通り
 - ①北国街道（森山から東山に向けて）
 - ②北国街道（浅野川大橋から城に向けて）
 - ③大手門前の通り
 - ④黒門前の通り
 - ⑤石引通り
 - ⑥金石街道

⑦横山町の広見

⑧北国街道（犀川大橋から城に向けて）

・ 城とは別方向に対し見通しを持つ通り

⑨寺町通り

⑩縦町通り

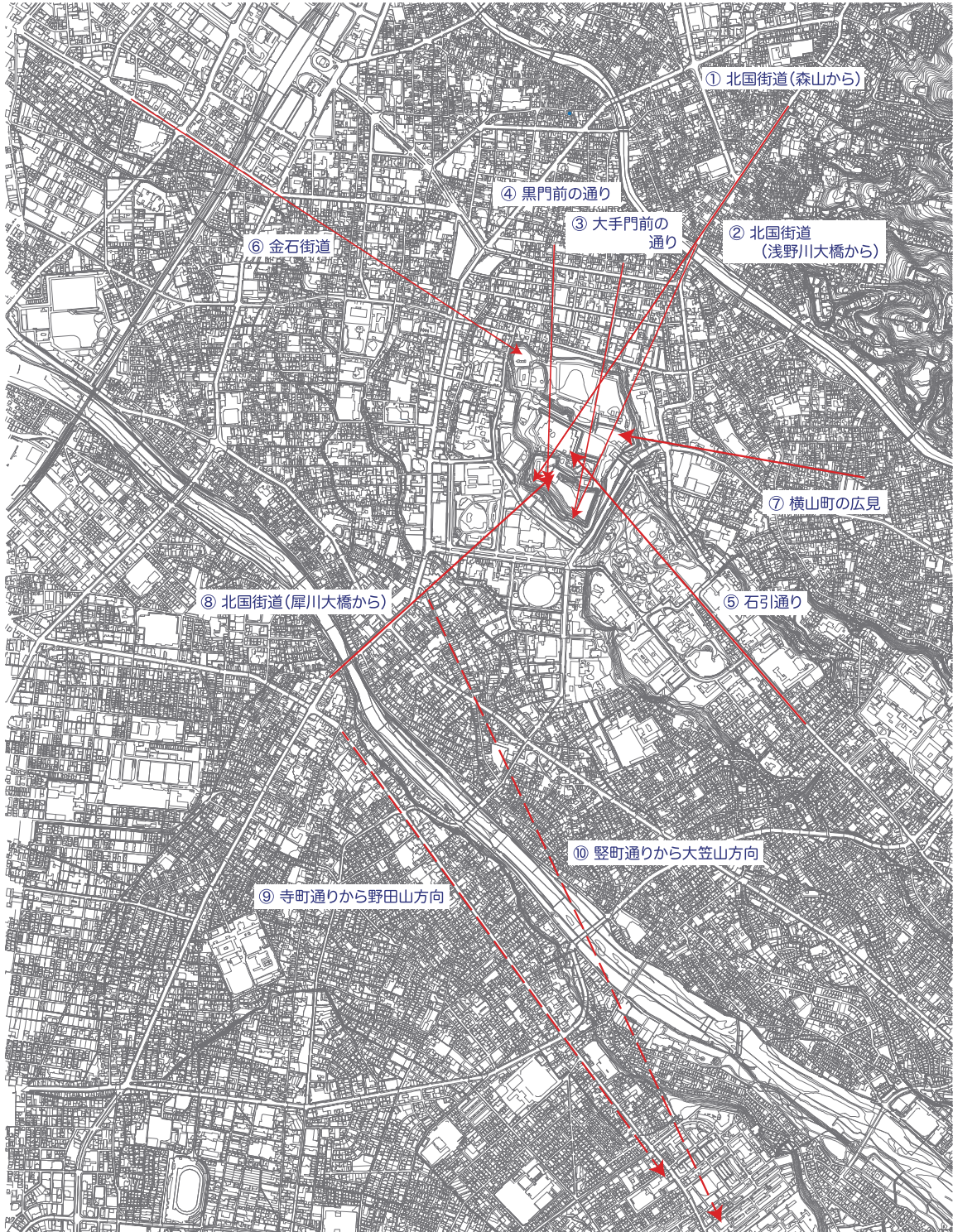


図-1 通りおよび断面位置図 S = 1/20,000

3-1 城方向へ見通しを持つ通りの景観の特徴

① 北国街道（森山から東山に向けて）

北国街道を上ってくる人々に対し、城から1.6kmほど離れた森山あたりから、大手門、菱櫓、三十間長屋が重なって見えたと思われる。仰角は5度以下であり、歩きながらも目を少し上に上げるだけで、城の構造物群が見えることになる。現在は、尾張町から大手町にかけて建つ高層建築物により、城への眺めは無い。(図-2)

② 北国街道（浅野川大橋から城に向けて）

浅野川大橋を渡る手前では、森山からの軸線が南にずれ、天守閣あたりの建物を軸線上に見せるかたちとなっている。現在は橋場町角の文学館建物や大手町の高層建築物により、城への眺めは無い。(図

- 3)

③ 大手門前の通り

城に近い大手門前の通りでは、大手門、河北門、天守閣が重なって見えたと思われる。①、②に続くこの眺めのシークエンスでは、城を構成する構造物のうち、複数の門が幾重にも重なって見え、城の守りの堅さを強調する眺めとなっている。この通りは現在、無電柱化され、大手門の一部である石垣への眺めが確保されている。(図-4)

④ 黒門前の通り

北国街道にほぼ直交するこの通りからは、黒門、二の丸の建物群、その奥に本丸の一部である戊亥櫓が見えたと思われる。

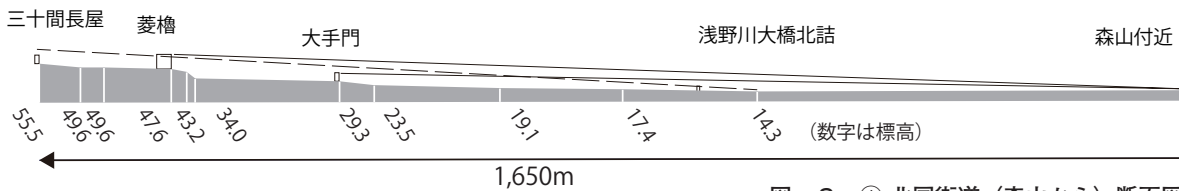


図-2 ① 北国街道（森山から）断面図

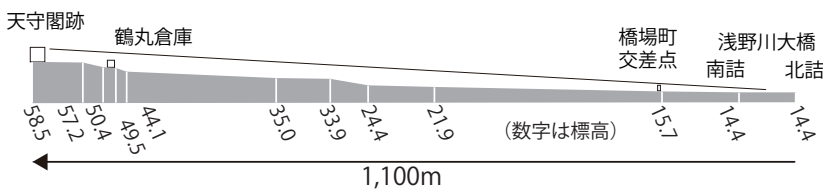


図-3 ② 北国街道（浅野川大橋から）

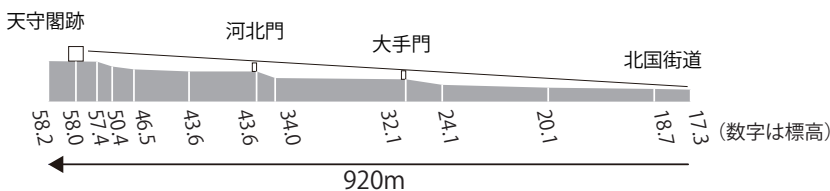


図-4 ③ 大手門前の通り

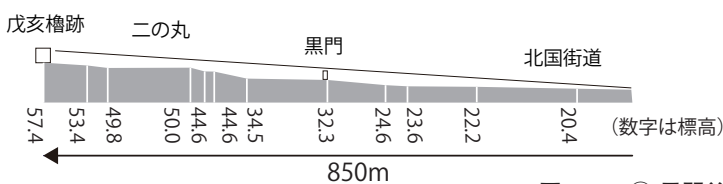


図-6 ④ 黒門前の通り



図-5 大手門前の見通し



図-7 黒門前の見通し

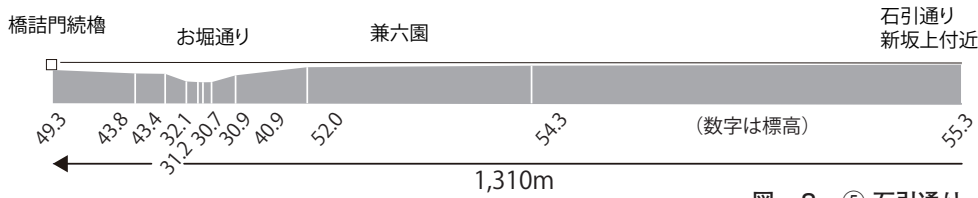


図-8 ⑤ 石引通り

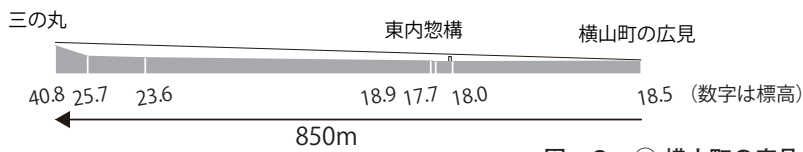


図-9 ⑦ 横山町の広見

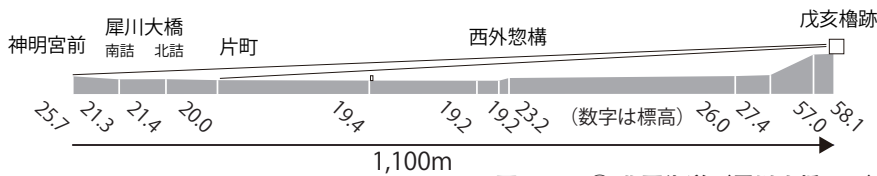


図-10 ⑨ 北国街道 (犀川大橋から)

現在は黒門付近の樹林が見える。

①から④にかけての眺めでは、段々と仰角が大きくなり、城も大きく見えるシークエンスとなっている。仰角は北国街道あたりからでも5度以下なので、首を上に向けて見るほどではないが、普段の目線より見上げる見え方となり、建物群の重なりと合わせ威厳を創出する効果があったと言える。(図-6)

⑤ 石引通り

南東の石引通りは、戸室山から石を運びやすいように直線的に作られたと言われている。しかしながら、小立野下馬地蔵より山よりの旧街道は地形に合わせて曲線が続く線形となっている。石の運搬も目的の一つであろうが、下馬地蔵のあたりからは城下ということで、威厳を見せる目的があったのではと思われる。(図-8)

現在は兼六園の樹木が大きく伸びていることから、城の構造物は見えない。通り全体は本丸より若干高い標高を持っており、兼六園の樹木が小さく整えられていれば、城内の五十間長屋に続く橋詰門続櫓を望むことができたと思われる。

⑥ 金石街道

六枚町より海寄りからのどの場所からも城がよく見えたと思われる。街道の軸は藤右衛門丸にぶつかる。六枚町では街道は北寄りに折れ、城方向への眺めが無くなる。現在はJR、新幹線の高架橋、芳齊町の建物群があり、この眺めは無い。

⑦ 横山町の広見

城の東端まで約900mの距離があり、広見から城の三の丸西端を見上げることができる。現在は東内惣構の上段に高層の病院と小学校が建っており、城方向への眺めは無い。

またこの通りの一本北側にある材木町の通りは、ほぼ東西軸に沿って作られており、こちらからは三の丸越しに菱櫓を望むことができたと思われる。現在は、小学校の建物により遮蔽されている。(図-9)

⑧ 北国街道 (犀川大橋から城に向けて)

犀川大橋南の神明宮付近から片町にかけて、街道は城方向へ向いている。神明宮付近や大橋上からは

片町の建物群の屋根越しに城の戊亥櫓あたりを望むことができたと思われる。特に大橋北詰からは通りが坂を下って伸びており、その先にある城は、より高い位置にあるように見えたのではないかと思われる。現在は片町通り沿いおよび広坂通り沿いの建物群の高さが高く、城への眺望は無い。(図-10)

3-2 城とは別方向に対し見通しを持つ通り

⑨ 寺町通り

藩政期からの言葉かどうかは定かではないが、「寺町通のような性格の人やね。」という言い方が金沢には残っている。まっすぐな性格という意味である。市街地の中で両側に建物がある状態で寺町通りほど長くまっすぐに伸びているものは、他の通りには無かったことを示していると思われる。この通りは前田家墓地のある野田山へ続く参道である。通りの眺めの軸線は野田山より若干東にずれているが、野田山につながる丘陵を見通しの受けとして設定している。参道として寺院群の塀と樹林が厳かな雰囲気を作っていたと思われる。

通りに直行する小路は広小路に近いあたりはほとんどなく、比較的小路の多い寺町1～3丁目あたりは足軽屋敷が集まっていた。南西から攻める軍勢が寄せてきた際は、通りに沿って敵軍勢を押しやることで寺院群敷地や足軽屋敷付近が強固な防衛ラインとなることを意図していたと思われる。



図-11 寺町通りから野田山方向への眺め

⑩ 豎町通り

直線部分の長さは片町から入った地点から天狗の広見（現在の三口新線の交差点）まで約400mある。高低差は約2mあるが勾配はほとんど感じられない。南に向かう見通しの先には大笠山（標高1822m）が聳える。見上げ角度は5度に満たず、目を動かすだけでその頂を捉えることは可能であり、迫力はないものの、通りの幅が狭く両側の建物が迫っていることと、建物の水平線が視線を誘導するため、この山の存在感は大きい。白山へ続く峰々の一つとして市街地の背景を形づくっている。天守閣があった頃は、そこから白山を望むことができたらしいが、標高と白山手前の地形の関係で、城下のほとんどの部分からは望むことはできなかった。城主としては城の膝元である豎町から信仰の対象である白山へつながる空間を作ってみたかったのかもしれない。

また、この通りから城方向へ向かうには、細い通りしかなく曲がり角がわかりにくい。城方面へ近づく道の曲がり角を分かりにくくするために、豎町通りの直線を強調し、こちらの方向への誘導性を高める目的もあったのではないかと推測される。



図-12 豎町通りから大笠山方向への眺め

4. 特徴ある景観についての考察

見通しの効く街路の断面を検討してみたところ、城の見え方は単純ではなく、城内の構造物をいくつか重ねて見せる意図があったと推測することができる。主街道から城の姿を見せる際には、眺めの奥行き方向に門や櫓を重層的に見せることで、守りが堅く攻めにくそうな印象を相手に持たせることができる。逆に城内からこれらの通りを眺めると、城へ攻め寄せる敵の数や様子を観察できることになる。また城とは異なる方向への見通しを持つ街路は、接続する細い路地を数少なくし、見通し方向の広がりや強調することで、城へ近づこうとする勢力の別方向への誘導を狙ったと思われる。

この城下町のデザインにおいては、外から来たものにとっては覚えにくく、目的地にたどり着きにくい複雑な街路パターンに加え、対照的に見通しの効く形がもう一つの防衛手段として用いられていることが推察される。景観の性質を利用した巧みな技といえる。

重層的な眺めを持つ特徴的な眺めが再現されると、城下町としての街並み景観は、今以上に魅力的なものとなると考えられる。しかしながら現在の環境では、天守閣や御殿など城の構造物が再現されるにはかなりの時間がかかると思われる。この景観的な特徴を向上させるためには、しばらくは、街路の無電柱化により電線を減らし見通しをすっきりさせることが有効な方策である。将来的には、この見通しの価値を市民で共有し、現状の景観条例にもある建築の規制、誘導につなげることを検討すべきであると考えられる。

(つば たかひろ 環境デザイン専攻/ランド
スケープアーキテクチュア)
(2018年11月7日 受理)